Davidson における言語観の変化

――言語、意味論、言語の話者という視点から――

青山晋也

はじめに

本論の目的は、言語、意味論、言語の話者という観点から、前期（Davidson(1967)前後）と後期（Davidson(1986)前後）における Davidson の言語観の変化を再構成することである。言語的規約の視点から行う、わかりやすい描き方の一つとして、規約ありの言語観から規約なしの言語観へといった形で語る方法もあるが、本論は上記の視点に立ち、そうした規約の観点からだけでは十分に捉えられないような変化を描き出すことを目指す。

１章ではまず前期の言語観を反映するものとして Davidson の意味論に関する考察を見る。そのあと２章で前期の言語観の特徴を四つ挙げ、続く３章でそれらに対応する後期の言語観の特徴を四つ挙げる。最後に４章で後期の言語観がもつ前期の言語観に対する批判的側面を取り上げる。

1.　前期の言語観を反映するもの

この章では前期の言語観を反映するものとして、まず自然言語の意味論が満たすべき条件を概観し、その後そうした条件を満たすものとして Davidson が提案する真理条件意味論を見ることにする。

1.1　自然言語の意味論が満たすべき条件

さて Davidson が考慮する条件は四つあり、それぞれ「完全性」、「有限性」、「合成性」、「実効性」と呼ばれるものである(1)。それぞれがどのようなものかを簡単に説明しよう。

まず意味論が完全であるとは、意味論が対象言語のすべての文に意味を与えるということであり、意味論一般が満たすべき条件だと考えられる。意味論が言語の意味的側面を説明するものであるなら、対象言語の文の中に意味を与えられないものが出てきてしまうような意味論は、それらの文の意味を説明していないのだから、避けられるべきだろう。この完全性を満たすために、自然言語という有限な存在者が習得する言語を考えた場合、以下の有限性や合成性を考える必要が出てくる。

意味論が有限であるとは、意味論において公理の数が有限だということである。この条件が自然言語の意味論に課されるのは次の理由からである。私たちは時間的にも記憶の上でも有限な存在であり、有限な知識しか持つことができない。したがって、意味論が話者

の言語的知識を適切に特徴づけているものであるなら、その意味論は有限でなければならないからである。

意味論が合成的であるとは、意味論が話者が複雑な表現の意味をその構成要素の意味とその結合の仕方に基づいて理解するという形で説明するものだということである。私たちは経験から得られた有限な文の材料をもとにして、今まで出会ったことのない文でも理解することができる。これは私たちが複雑な表現の意味をその構成要素の意味の知識とその結合の仕方の知識に基づいて理解しているからだと考えられる。それゆえ、意味論が話者の言語的知識を適切に特徴づけているものなら、意味論は合成的でなければならない。

最後に意味論が実効的であるとは、意味論が文の意味を機械的に決定できるような仕組みをもつということである。これに対して実は Davidson 自身は根拠を挙げていないのだが、飯田(2002)では、この条件は「われわれの言語理解の中核に存在すると思われる自動性を、理論に反映させるためである」（飯田、2002、p. 86）とされ、この自動性はおそらく Davidson が実効性を意味論に求めることと無関係ではないだろうと言われている。ここで言われている自動性とは、私たちが「雪が降っている」といった文を聞いたとき、その文が何を意味するのかということについて迷うことはなく、その文が何を意味するのかをほとんど否応なしに理解してしまっていることを指して使われている（ibid.,p. 86）。

さて今ここで挙げた条件について Davidson 自身の文で確認してみよう。

> 自然言語の諸意味論についての理論はすべての有意味な表現の意味を与えることを目的としているが、その理論がこの目的を達することができるとすると、問題となるのはその理論がどのような形式を取るべきなのかである。有意味な表現の数には明確な制限がないように思われるので、使いものになる理論は有限な数の特徴がパターン化された形で現れることにもとづいて各表現の意味を説明しなければならない。(Davidson, 1970, p. 55)

それぞれ「すべての有意味な表現の意味」から完全性、「有限な数の特徴がパターン化された形で現れることにもとづいて各表現の意味を説明しなければならない」から有限性と合成性を Davidson が考慮していることがわかるだろう。またこの文とは別に「ある言語の話者は、その意味、あるいは複数の意味を実効的に（effectively）確定できる」(Davidson, 1967, p. 35)や「それ［実効的に確定できること］がどのようにして可能なのかを示すのが意味論の中心的課題である」(ibid., p. 35、［ ］内筆者)といった文から Davidson が実効性を考慮しているのを確認できる。

1.2　真理条件意味論

Davidson(1967)は Tarski の真理論を自然言語の意味論として用いるというアイデアを提案した。その意味論は真理条件意味論と呼ばれ、意味論的原素 semantic primitive とそれらの組み合わせ方という二種類の有限個の公理と、そうした公理をもとにして導かれる無限個の定理とからなっており、また公理から定理の導出の際に用いるいくつかの推論規則が設定される(2)。

いま述べた無限個の定理とは基本的な形では以下のような（T）型をしていて、

（T）s が真であるのは、p のときまたそのときに限る」

という形をしており、（T）型をした定理はＴ文と呼ばれる（ここで s は対象言語の文（正確には構造記述名）で置き換えられ、p はメタ言語の文によって置き換えられる）。例えば、「雨が降っている」という文には、

「雨が降っている」が真であるのは、雨が降っているときまたそのときに限る

といったＴ文が対応する。ただし、対象言語が「私」や「今」といった指標詞を含んだ文になれば、Ｔ文はもっと複雑なものとなる。

このような形で考えられた意味論において先ほどの四つの条件がどうなるかを見てみよう。まず公理は有限であるから有限性は満たされる。また二種類の有限の公理から複雑な表現の真理条件を合成的に与える仕方はすでに Tarski によって示されているので、このことから合成性が満たされる。また公理から定理を導出する際、導出規則が公理に機械的な適用されることで定理が得られるので、このことから実効性が満たされることになる。ただ完全性は今の段階では満たされておらず、今後満たされるかどうかもわからない。

2. 前期の言語観

今までの議論にもとづいて、前期の Davidson の言語観を描き出してみよう。本論の観点から取り上げたい前期の言語観の特徴は四つである。

（1）前期において考察の対象になるのは、ある言語の話者が共通して習得するものとして考えられているような一般的な言語である。（以下このような言語を「言語」と表記する。）

（2）そこから「言語」－意味論という構図が生まれる（意味論もそうした「言語」との関係において考えられる）。

（3）「言語」の話者として考えられているのは抽象的な話者である。

（4）文はひとつの文字通りの意味をもつ。

2.1 「言語」と抽象的話者

以下では（1）、（2）、（3）についてまず確認するが、それには次の二点が参考になる。

①有限な公理として考えられているものが及ぶ範囲をどこまでと考えるか

②その「言語」が含む文の及ぶ範囲をどこまでと考えるのか

まず①のポイントは自然言語に対して有限な公理を持つ意味論を考えた場合でも、意味論の対象となる言語が一般的な「言語」の場合には、完全性を満たすために必要な公理の数が（言語的知識の上で理想化されていない）実際の話者の持つ言語的知識よりはるかに多いものになることである。なぜなら、そのような場合に必要となる公理とは、その「言語」で表現可能な文の構成要素に対応する公理（基礎公理と再帰的公理）のすべてだろう。しかしそうなると、そのような公理の数と対応するのは、実際の話者がその「言語」で表現可能な文の構成要素に対して完全な言語的知識を持たないことを考慮すれば、実際の話者が持つ以上の言語的知識ということになる。それゆえ、1.2 の真理条件意味論において考えられている有限個の公理の範囲は、確かに有限ではあるだろうが、実際の話者がもっている言語的知識を特徴づけるために必要な数を超え出たものとなる。

今度は②について考えてみよう。今見たように、すでに公理において、完全性のために必要な公理の数は、実際の話者の言語的知識を特徴づけるために必要な公理の数よりはるかに多いものだった。そうなると当然公理をもとにして生み出される定理の数も、実際の話者が限定された言語的知識をもとにして理解する文の数よりはるかに多いことになる。それゆえ、この意味で、1.2 で言われているような、公理から帰結する定理によって意味の与えられる対象言語の文の範囲は実際の話者が理解する文の範囲を超え出ることになる。このような形で意味論の対象となっているものが先ほどの「言語」と表記される言語であり、以下では「言語」に対して意味論が与えられるというこうした構図を「「言語」－意味論」と呼ぶことにしよう。

さてこうした「「言語」－意味論」という構図において話者というものを考えた場合、その「言語」の話者は、その「言語」を話している（ｉ）完全な言語的知識を持たない実際の話者[(3)]、（ii）理想化された完全な言語的知識を持つ抽象的な話者、という二重の意味をもつことになる。今見たように、前期の Davidson にとって、意味論が与えられる「言語」

というのは実際の個人の話者が理解できる文以上の文に意味を与える定理を含むものである。したがって、そうした「言語」に対して、その文のすべてを理解する話者というものを考えるとき、そのときに考えられている話者は、実際の話者というより、実際の話者以上の文を理解することができるという意味で、抽象的な話者が想定されていることになる。

2.2 (4) 文はひとつの文字通りの意味をもつ

Davidson の考える真理条件意味論では、「雨が降っている」という文に対して、導出規則に従って公理を機械的に適用することでＴ文が導き出される。この過程では対象言語の同じ文に毎回同じＴ文を機械的に与えるという操作が行われ、これは実効性条件を反映するためと考えることができる。

こうした過程の特徴づけでは、文や発話の解釈者は、つねに同じ文が同じ意味を持つものとして理解するという意味で、解釈者はその理解の過程に何らかの影響を与え、その過程を変化させることができるような存在ではないと言える。こうした機械的な処理が実効性条件の眼目の一つではあるが、こうした考え方が次の考え方、すなわち言語とはその言語の話者がみな共有するものとして考えられた一般的な「言語」であるという考え方と結びつくと、文はひとつの文字通りの意味をもつことになる。

これは次の二つの理由による。まず実効性条件が描くところでは、文の解釈者はある文が与えられたら、毎回それと同じ文には同じ意味を与えることになる。ここには意味の変化を引き起こすようなものは何もない。次に、私たちが共通に習得するものとしての「言語」は、私たちがその「言語」に何らかの仕方で介入し、語の意味を勝手に変えられるようなものではない。というのも、そうした「言語」は話者からは切り離された抽象的なものだからである。したがって、意味の変化の可能性はどこにもない。

ここに見られるような、文が固定的に一つの特定の意味をもつとする考え方は「「言語」ー意味論」という構図に特徴的なものである。なぜならこの構図では、第一に「言語」が話者の習得するものという点で話者に先行し、それゆえ実際の話者から切り離され、第二に「言語」の文の意味もその切り離された「言語」とそうした「言語」に与えられる意味論との関係においてすでに定まっていることになるはずだからである。

3. 後期の言語観

後期の Davidson の言語観を２章の前期のものと対比して書くと次のようになる。

（１）後期において考察の対象となるのは、個人の発話の解釈の仕方（個人言語）である。

（２）「個人の発話の解釈の仕方ー意味論」という構図が採用される。

（3）解釈者と話者は（「抽象化された」と対比された意味での）実際の個人である。
（4）発話は複数の意味をもちうる。
以下ではまず後期の言語観の中心的概念である「事前理論 prior theory」と「当座理論 passing theory」について説明し、その後「最初の意味 first meaning」という新たな概念を見よう。

3.1　事前理論と当座理論

後期においては、話者と解釈者（聞き手）はともに発話の解釈の仕方を二つもち、そうした異なる解釈の仕方を描くものが事前理論と当座理論である(4)。以下で Davidson が事前理論と当座理論をどのようなものとして考えているのかを確認しよう。

> 聞き手にとって、事前理論とは話者の発話を解釈するのに先立って聞き手が準備している仕方を表し、一方当座理論とは聞き手が話者の発話を**実際に**解釈する仕方である。話者にとって、事前理論とは話者が解釈者の事前理論と**信じる**ところのものであり、当座理論は話者が解釈者に使うよう**意図している**理論である。（Davidson, 2005, p. 101、強調 Davidson）

このように、まず話者の事前理論とは、発話する前に話者が予測する解釈者の解釈の仕方を描くものであり、解釈者の事前理論とは、逆に話者の発話に先立って解釈者が予測する話者の解釈の仕方を描くものである。話者の当座理論とは、発話する前に話者が解釈者に「こう解釈してもらいたい」と意図している解釈の仕方を描くものであり、解釈者の当座理論とは、話者の発話を聞いたあと、解釈者が話者の意図したものに沿うと自分が想定する形で実際に解釈する仕方を描くものである。

3.2　最初の意味

Davidson が「最初の意味」を導入する目的は、「話者の意味と文字通りの意味との間の区別」(Davidson, 1986, p. 91)を明確にするためであるが、わざわざ「文字通りの意味」の代わりに「最初の意味」を用いるのは「文字通りの意味」という言葉が望ましくない多くの含みをすでにもってしまっているからである。

最初の意味とは、解釈者からすれば、話者の発話に対して与えられる最初の解釈（解釈者が発話前に話者がもっていると想定する解釈の仕方（事前理論）によって与えられる暫定的な解釈）であり、話者からすれば、自分の発話を解釈者がまず初めに解釈するであろうと想定する解釈（話者が発話の前に解釈者がもっているだろう想定する解釈の仕方（事

前理論）によって、話者が「解釈者はこう解釈するだろう」と考えているときの発話の解釈）である。このように、最初の意味とは、話者からは、解釈者が最初にたどり着く解釈として想定されている意味であり、解釈者からすれば、話者の発話に対してまず初めに暫定的に与えられる意味のことである。

注目すべきは、「最初の意味」という言い方からわかるように、後期において Davidson は発話（文）の意味に複数性を認めるようになる、ということである。ただ注意したいのは、それはある発話が同時に複数の異なる意味を持つということではない。そうではなくて、解釈過程の異なる時点において、その発話が異なった仕方で解釈されうるということである。それゆえ、ある時点において発話は特定のことを意味するものとして解釈される。以下ではこうした考え方によって意味論が新たにもつ性格とその意味論が反映する私たちの解釈プロセスとを見てみよう。

3.3　後期の意味論がもつ二つの性格

まず注目しておきたいのは、事前理論と当座理論が人や発話によって異なるという性格である。私たちは会話の相手一人ひとりに対して、その人に応じた解釈の仕方（事前理論）を準備する。それは会話の相手一人ひとりが知っている事柄やもっている語彙が異なっているからである。私たちは会話の相手について知っている情報や共有している経験などに基づいて、そうした解釈の仕方（事前理論）を用意する。また私たち（解釈者）は会話の相手の発話ごとにその発話に応じた解釈の仕方（当座理論）をもつ。そうした解釈の仕方（当座理論）が対象としているのは一回一回の発話である。

次に注目しておきたいのが事前理論と当座理論が会話の進行に従って変化していくという性格である。事前理論や当座理論として表現される解釈の仕方は会話の相手の各発話ごとに更新されていく。まず私たちは会話を始める前に会話の相手に応じて解釈の仕方（事前理論）を準備する。そして当座理論により描かれる解釈の仕方によって実際に相手の発話を解釈するわけだが、そのとき発話をどのように解釈したのかという情報は次の発話に対して準備する解釈の仕方（事前理論）に反映される。もちろんこうしたプロセスは繰り返されていく。このように、相手との会話が進行するごとにその相手に関する情報や共有している経験が増えることで、事前理論によって描かれる解釈の仕方は繰り返し更新されていき、また同じ発話に対しても新たな情報が得られれば当座理論に対応する解釈の仕方も繰り返し変化しうる。

4.　後期の言語観の自己批判的側面

ここでは後期の言語観が前期の言語観に対してもっている自己批判的側面を取り上げ、その言語観の変化の理由を探ってみよう。まず後期の言語観が批判の標的とする（前期の言語観がその一例と言える[5]）言語観がどのようなものかを確認しよう。

4.1　標的とされる言語観の三つの原理

Davidson は「最初の意味」を使って、多くの哲学者や言語学者が（言語の意味的側面に対して）共通してもっているだろう言語観を三つの原理に分けて問題にしていく。

（1）**最初の意味は体系的である。**言語能力を持つ話者ないし解釈者は、自分の発話や他者の発話を解釈することができ、その解釈は発話における部分ないし語の意味論的性質、および発話の構造に基づく。これが可能であるためには、多くの発話の意味のあいだに体系的な関係がなくてはならない。

（2）**最初の意味は共有されている。**　話者と解釈者がつねにコミュニケーションに成功するためには、彼らは（1）で記述した種類の解釈の方法を共有していなければならない。

（3）**最初の意味は習得された規約と規則性によって支配されている。**話者ないし解釈者の体系的な知識や能力は、実際の解釈の場にさきだって習得されており、性格上規約的なものである (Davidson,　1986, p. 93、強調 Davidson)

Davidson が主張するのは、第一に（3）は捨て去らなければならないこと、そして第二に（1）と（2）には理解の変更、ないし修正を加えなければならなくなること、である。Davidson が（3）を攻撃するために注目するのはマラプロピズムである。

4.2　マラプロピズムと当座理論の一致

マラプロピズムとは簡単に言えば言い間違いのことで、例えば「デカルトの情念論」と言おうとして「デカルトのジョン・レノン」と言ってしまうような場合がそれに当たる。マラプロピズムに関して重要なことは、私たちがコミュニケーションにおいてマラプロピズムに出会うとき、それは意味不明のものとなるのではなく、たいていの場合そこから問題なく話者の意図した意味を理解するということである。

Davidson は事前理論と当座理論を使って、私たちがコミュニケーションにおいて日常的に行っているマラプロピズムの理解を次のように説明する。解釈者は話者の「デカルトのジョン・レノン」という発話に対して、準備していた解釈の仕方（話者の発話に対する事

前理論）でいったん「デカルトのジョン・レノン」と解釈する。しかし、解釈者はこの解釈のおかしさに気づき、「デカルトの情念論」という解釈を導く解釈の仕方（当座理論）でその発話を解釈する。もちろん、この解釈に到るまでに、いくつかの解釈を重ねなければならないかもしれない。

マラプロピズムにおけるコミュニケーションの成功をこのような形で描いたあと、Davidson は話者と解釈者のあいだでコミュニケーションが成功するとは一体どういうことなのかについて次のように結論する。

> コミュニケーションが成功するために共有されなければならないのは当座理論である。というのも、当座理論というのは解釈者が実際に発話を解釈するために使うものであり、またそれは話者が解釈者に使うよう意図している理論であるからである。聞き手と話者の当座理論が一致する場合にのみ、理解が成立する。（中略）当座理論というのが、細部はさておき、合意が最大になるところなのである。話者と解釈者が話をするにつれて、彼らの事前理論は似てくることになり、当座理論についても同様である。当座理論が一致するときこそ、合意と理解の漸近線に到達するのである。(Davidson, 1986, p. 102)

以下ではこのような結論の重要な二つの帰結を 4.3 と 4.4 でそれぞれ取り上げよう。

4.3　一般的な理論は解釈の現場では役立たない

Davidson はコミュニケーションの成功とは当座理論の一致であることにもとづいて次の（ｉ）と（ii）を指摘した後、解釈の場で発話ごとに生み出されていく当座理論と対比されるような、発話の前に習得され、かつ変化しない固定的なものとして言語を特徴づけるような理論（4.1 の三つの原理で言語を特徴づけるような理論）を批判（iii）する。

（ｉ）当座理論は解釈以前に習得したり学んだりするようなものでない。それは発話一つ一つを実際に解釈するときの解釈の仕方を描くものであり、その解釈の仕方はむしろその場その場で微調整されながら生み出されていくものである。またそうした解釈の仕方（当座理論）を習得したり学んだりしても役には立たない。なぜなら当座理論はある話者のある時点におけるある発話に解釈を与えることだけを目的としているからである(Davidson, 1986, pp. 102-3)。

（ii）コミュニケーションが成功するために共有されなければならないのは当座理論であ

る。（最初の意味を与える事前理論が共有されている必要はなく、実際にたいていの場合共有されていない(Davidson, 1986, p. 103)。）

（iii）したがって、「一般的な枠組みないし理論は、それが何であれ、解釈に必要とされるものにおいて重要な要素であるかもしれないが、それが必要とされるもののすべてではありえない。なぜなら、それは特定の話者によって発話されるものとしての、特定の言葉や文の解釈を与えることに失敗するからである」(Davidson, 1986, pp. 105)と結論する。

4.4　三つの原理の修正

このような結論を導いた後、Davidson は標的とする言語観を少なくとも次のような形で理解、ないし修正しなければならないと述べる。まず「原理（1）と（2）は通常とはかなり異なった形で理解されるなら生き残る」(Davidson, 1986, p. 102)という。

原理（1）に関して、それがどのような形で理解されるべきなのかは明確に述べられていないが、これまでの議論から、少なくとも（1）が述べる体系性は話者の発話ごとの体系性についてのものであるということは言える。つまり、そうした体系性は会話の相手によって異なり、そして発話ごとに更新されうるものとして理解されなければならない。

次に原理（2）についてだが、マラプロピズムの例がまさに最初の意味が共有されていなくてもコミュニケーションが成功する例である。これまでの議論を考えれば次のような例を考えることができるだろう。まず話者は事前理論において「デカルトの情念論を読んだ」という発話を解釈者がデカルトの情念論を読んだを意味するものとして解釈するだろうと考え発話しようとした。しかし、言い間違いによって「デカルトのジョン・レノンを読んだ」という発話をデカルトの情念論を読んだと意味するものとして発話してしまったわけである（つまりこれが話者の最初の意味）。もちろんこの場合、話者の当座理論においても「デカルトのジョン・レノンを読んだ」という発話はデカルトの情念論を読んだと意味するものとなる。ここで問題は解釈者がおそらく事前理論から、「デカルトのジョン・レノンを読んだ」という発話をデカルトのジョン・レノンを読んだを意味するものとして解釈するだろうということである。このとき両者の最初の意味（事前理論）は共有されない。したがって、話者の最初の意味は当座理論に移行し、当座理論において両者が一致すると考えるのなら、話者の最初の意味は解釈者に理解されるので、話者の最初の意味の共有は言えるかもしれない。これが（2）の述べることと異なることは間違いないだろう。

原理（1）（2）は修正可能であるのに対し、原理（3）は拒否されなければならないと Davidson はいう。これは（3）をコミュニケーションの成功に十分だと考えると、マラプ

ロピズム（「デカルトのジョン・レノン」）は単なる意味のわからない発話のままに留まってしまうからである。実際にはマラプロピズムは解釈不能な状態に留まらず、私たちは発話を解釈する、つまり話者の意図（「デカルトの情念論」）を理解する。こうした事態は、規約がコミュニケーションの成功に十分だと考えている限りは説明できない。また（3）はコミュニケーションの成功に必要でもない。これはコミュニケーションが成功するためには発話の解釈に先立って習得され、規約的に用いるべきものが共有されている必要がないからである。つまり、規約的に用いるべき共有されたものがそもそもコミュニケーションの成功には必要ないのである。これのかりやすい例としては、共有する言語的知識を持たない外国人との会話においても発話の理解が可能であることを考えればわかるだろう。こうしたことから、言語使用の規約性は否定されなければならないことになるのである。

少なくともこのような形で 4.1 の三つの原理を変更（ないし拒否）しなければならず、それゆえ Davidson は三つの原理が描くような「言語の使い手が獲得し、それからさまざまな場面に適用する明確に定義され共有された構造という考えを、私たちは諦めなければならない」(Davidson, 1986, p. 107)と結論する。コミュニケーションを成功へと導くものとは、話者と解釈者が共有する「言語」を携えて会話に臨むことではなく、発話において二人が当座理論を一致させることに尽きるのである。

おわりに

前期において考察の対象となっていた言語とは、あるコミュニティーに属する人がみな共有して習得するような一般的な公共の「言語」であった。こうした「言語」に対して意味論を与える際、その「言語」の話者が関係してくることはなかった。なぜなら、この「言語」はその話者に先行して存在するものとして想定されていたからだ。後期では、コミュニケーションの場で他者の発話を理解するために用いている実際の言語とは「言語」ではなく、個人言語（発話の解釈の仕方）だという形で捉えなおされた。そこにおいては、コミュニケーションは発話前に習得される「言語」をそのまま使っていれば成功するといったものではなく、むしろ解釈者は発話ごとに解釈の仕方を修正しながら一つ一つの発話の解釈を行わなければコミュニケーションは成功しないとされる。解釈者は発話の意味に大きく関わり、その点では、後期の解釈者は前期の解釈者よりも多くのことをなさなければならず、その意味で言語を知っていることと世界の物事を知っていることとのあいだの境界が消えるとも言われる(Davidson, 1986, p. 107)。このように、後期の言語観は、標的とした三つの原理をもつ言語観が、実験の場で実験家によって手を加えられる理論と同様に、実際の解釈の場でうまく機能できるものとして修正されたものと理解できるだろう。

註

(1) デイヴィドソン自身はこのような形で明確に述べているわけではない。こうした呼び方は飯田(2002)を参考にした。
(2) 真理条件意味論が実際のどのような形をとるのかをデイヴィドソンは示していない。Lepore and Ludwig(2005b)や Lepore and Ludwig(2007)を参考にしていくつか補足しておこう。まず対象言語として「…は大胆だ」という述語、「Donald」と「Paul」という二つの名前（固有名辞）、論理定項として「かつ」と「または」、読点「、」をもつ断片的な日本語を考えてみよう。このとき、この対象言語の真理論（Davidson 的な真理条件意味論）は公理として基礎公理と再帰的公理をもつことになる。基礎公理は名前に指示条件を割り当てるものと、名前に述語が続いた原子式（例えば「Donald は大胆だ」）に真理条件を割り当てるものの二つがあり、こうした基礎公理が意味論的原素と考えられる。また再帰的公理は原子文を論理定項でつなげた分子文（例えば「Donald は大胆だ、かつ Paul は大胆だ」）に対して、原子文の真理条件に基づく形で真理条件を与えるものである。こうした再帰的公理が「それらの組み合わせ方」と理解できる。
(3) 「実際」とはいっても、例えば概して合理的な話者が考えられているといった意味では、ある種の理想化はされており、あくまで「抽象的な」話者との対比のために「実際」という言葉は使われている。
(4) デイヴィドソンにとって、実際の話し手が知っているのは発話の解釈の仕方であり、意味論はあくまで理論家がそれを描き出したものである。それゆえ実際の話し手がそうした意味論を「持っている」という言い方は正確な表現ではない。しかし、デイヴィドソンは４章で触れる三つの原理のうちの（２）に対して、「原理（２）が言うのは、コミュニケーションが成功するためには解釈の体系的な方法が共有されていなければならないということである。（以下では私は次のことを想定する。すなわち、解釈者は私たちが彼の言語能力を記述するために用いる理論を用いているかのように、その方法を理論と呼んでも害はないと想定する）」(Davidson, 1986, p. 96)と述べる。このような想定のもと、話者や解釈者も理論を持っているような記述がされることので、このことには注意が必要である。また以下「発話を解釈する」とは、発話に対して１．２で述べた形で真理条件を与えるということである。
(5) デイヴィドソン自身の言葉では「それ［デイヴィドソンが Davidson(1986)で行った考察］によって、（自分を含む）何人かの哲学者が言語**と呼んでいた**ようなものは存在しないという結論へといたる。」(Davidson, 1994, p. 110、強調デイヴィドソン、［］内筆者)

文献

飯田隆 (2002).『言語哲学大全Ⅳ』、勁草書房
Davidson, D. (2001). *Inquiries into Truth and Interpretation*, Oxford: Clarendon Press.
(1991, 野本和幸他訳,『真理と解釈』, 勁草書房.)
Davidson, D. (2005a). *Truth, Language and History*, Oxford: Clarendon Press.
――― (1965). 'Theories of Meaning and Learnable Languages,' in Davidson (2001), (pp. 3-16).
――― (1967). 'Truth and Meaning,' in Davidson (2001), (pp. 17-36).
――― (1970). 'Semantics for Natural Languages,' in Davidson (2001), (pp. 55-64).
――― (1986). 'Nice Derangement of Epitaphs,' in Davidson (2005a), (pp. 89-107).
――― (1994). 'The Social Aspect of Language,' in Davidson (2005a), (pp. 109-25).
Lepore, E and Ludwig, K. (2005b). *Donald Davidson*: *Meaning, Truth, Language, and Reality*, Oxford: Clarendon Press.
Lepore, E and Ludwig, K. (2007). *Donald Davidson's Truth-theoretic Semantics*, Oxford: Clarendon Press.

［京都大学大学院修士課程・哲学］